Adult Only

# 幽幻遊戯

帝都歴異妖者奇譚　其ノ二

俺は、お前の『狗』だ。

2014 RENGYOKUTO RikaRokka

この世界には人間以外のものが存在する。
例えば、日本の帝都。
長く時を経た食器や雑貨が魂を持ち、妖怪へと変化して、そのまま蔵に住み着いたり。
二十年を超えて生きた猫の尾が割れ、行灯の油をぺろりぺろりと舐めたり。
柳の傍らに、ぼんやりと立つ影の薄い幽霊がいたり。
極稀に、羽目を外した彼らの大集合である百鬼夜行が空を横切ったり。
それらすべて、まとめて異妖者（こともの）と呼ばれている。
そして、帝都だけでなく世界中に存在する。数多に――

2014 RENGYOKUTO RikaRokka

# 幽幻遊戯

帝都歴異妖者奇譚　其ノ二

2014 RENGYOKUTO RikaRokka

## 序之一・一八六五　帝都誕生前　上海密談

一面の灰色の空。
その下の海は真っ黒。
曇っている為だけではなく、船の油や生活汚水が流れ込み、街の者達が綺麗にする気力もないので大層汚れているからだ。
ぷかりぷかりと黒い海面に浮かんでいるものは、大小無数の木屑、新聞、煙草の吸い殻、白菜や青菜の葉、欠けた貝殻、酒瓶、薬瓶、煙管、紙袋、壊れた扇、大量の血で斑に染まった衣類、包丁、鳥銃（マスケット）の銃身（バレル）、顔面の右半分が割れた西洋人形、虫の死骸、白い腹を出した魚の死体や骨、動物の死体、人間の男の右腕、それに纏わりつく小さな影……すべて律動的に黒波間に浮かんでは沈みを繰り返している。
それを宝石のように燦めく瞳で退屈そうに眺めているのは小柄な少女だ。白兎の毛皮が縁を飾るカシミアの白マントを羽織った十二歳の彼女は、胸に抱いている大きめの白金のシーズー犬を撫でながら、やっと言葉の途切れたそちらを見ることはなく、言った。
「それで？」
愛らしい唇から零れる声は、可憐かつ高貴な少女らしさに溢れていながら深い力強さも持ち合わせていた。
「それでと申されては、話は先に進みませぬ」
困ってはいるが引く気配のない声で答えたのは、がっしりとした体躯の中年男性だった。
どちらも日本語で会話をしている。その方がこの街……上海では会話の内容がわからぬ者が多い為だ。
日本では出来ぬ相談をする為に、少女は英国（イギリス）は倫敦（ロンドン）から呼び出された。
少女を呼び出した、わざと目立たぬ平凡なコートと帽子を被った男は日本は薩摩から来ていた。
ちらり、ちらり。汚れた港街に純白の雪が降りしきる中、男は言葉を続けた。
「倒幕にご協力願えませぬか。昴子（すばるこ）様」
昴子と呼ばれた少女は返事の変わりに小さく欠伸をした。釣られたように胸の中の犬も。
「英国は日本相手の貿易に苦戦していると聞き及んでいます。我々は幕府の腰の重さに業を煮やしている。我々倒幕派と英国の利害は一致しています。ですが、我々は外交の手段を持っておりません。英国王室にご縁のある日本人の貴女様に縋るしかないのです。どうか、ご協力を……」



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

「興味ありません」
「昴子様！」
「いただいたお手紙には私と相談がしたいと書かれてました。今、ご返答をしました。これ以上何か望まれても知りませんわ。では、私はこれで。せっかくここまで来たのだし、租界を見物して英国に戻りますわ」
「お祖父様の仇を討ちたくはありませぬのか!?」
それは男の切り札だったのだろう。胸を張り、昴子に放たれた鋼の声が雪の港に固く響いた。
海からの風にミルクティー色の長い波髪をたなびかせ、マントの裾を翻しかけた昴子の足が止まる。
「……成る程。それでお祖父様ではなく、私を交渉相手にお選びになったのね」
キンと。少女の声が凍る。あてられたのか、鼻の低い犬の毛が少し膨らんだ。
「それで私が意のままになるとでも思われたのかしら？残念ですわね。今ので尚更、貴方がたにご協力する気は失せました。他をあたられるといいですわ」
今度こそ昴子は海に向かって歩を進めた。
「お待ちください、昴子様！」
いよいよ港の積み石に白い皮ブーツの足先が届く、そのとき——細い鼻梁がすんと動いた。視線がそちらへ流れる。
星空の瞳が捉えたのは、半分俯せで倒れている一糸纏わぬ少年の肢体だ。煉瓦造りの倉庫と倉庫の間に押し込められるように打ち棄てられていた。昴子の視線を追った男がぎょっとする。
「ご覧にならない方が。あれは役立たずになった男娼かと。もう助からないでしょう。周囲に鼠も集っているようですし……」
男が確信を持ってそう言ったのには理由があった。
氷点下を越える寒さの中、どのくらいそこで倒れているのか。少年の肌は白い蝋燭色となっていた。力なく広がった下肢の向こうの菊座はぱっくりと開いたままだ。大勢の男に陵辱された跡なのか、限界を超える太さの異物を挿入されたのか。繊細な筋肉はもう役立たなくなっている。そこから痩せた太腿へと血が伝い、地面に流れ落ち続けていた。手入れされていない首まで届く黒髪の底に沈む半眼に光は宿らず。だらしなく開いたままの唇からは止めどなく血と涎の斑が滴り落ちている。少年から濃密に漂う甘い香りは阿片。中毒特有の不眠が続く中で幻覚を見ているのか、時折、痩せ細った指が極々僅かにひくりと揺れる。


2014 RENGYOKUTO RikaRokka

男だけでなく、誰が見ても時間の問題だと感ずるだろうが、昴子はそれ以外のものも見て、少年に迫る死を悟った。

泥と汚物に塗れた白い足に。血で汚れた太腿に。骨に皮が張りついているような胴に。幻覚に小さく踊る指先に。折れそうな首に。目ばかり大きくなっている顔に。ずっと梳られてはいない髪に……それが絡みついていた。

――尸鬼（シェングウェイ）。

上海に住まう異妖者（ことものの）の中で尤も数多い、体長十センチほどの小鬼だ。何十体ものそれが少年の躰に纏わりついている。死に行くのを待っているのだ。屍肉を喰らう為に。食べ残しから同胞が作られるのを。虹彩も瞳孔も真っ黄色な目をキロキロと動かし、キイキイと鼠に似た声をあげ、少年の躰の上を楽しそうに動き回っている。

尸鬼は力が弱い。その為、普通の者には見ることができない。微かに聞こえる声で物陰に鼠がいると勘違いをする。昴子の横にいる男のように。

昴子の胸の中で「はっぷしゅん」と犬がくしゃみをした。それは勢いのある小さな嵐となり、少年の躰上で好き放題している尸鬼達を吹き飛ばした。脅え逃げ去る者もいれば、未練がましく戻って来る者がいる。その様子を見て、犬は苛立たしげな溜息を一つついた。

「彼、助からないと思います？」

上海語で質問する昴子に、薩摩代表も咄嗟に上海語で応じた。

「え？　ええ……このさまでは……」

男の言葉を耳にして少女は微かな毒と邪気を乗せ、微笑む。

「では、助けてみたくなりました」

天の邪鬼な昴子の返答に男はついていけず首を傾げる。

「貴方の願い、聞いて差し上げます」

「なんと!?」

「報酬はあそこで倒れている少年がいいですわ。あの方の日本人としての身分証をいただけますかしら。偽装できますわよね？」

突如切り替わった少女の日本語で、男も我に返り、母国の言葉に戻した。

「そ、それは可能ですが、よろしいのですか？　あんな少年で……」

「お金はあります。地位も名誉も大英帝国で手に入れました。そんな私を満足させられるような報酬を貴方がたが用意できますかしら？」

言葉を詰まらせ、男は眉を下げた。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

相手の表情の変化に満足した昴子は、右手を胸の高さに上げ、海へ向けた。

「おいでなさい。私の潜水飛行魔法機（愛機）」

愛らしい声に呼応し、白い手袋に包まれた小さな掌から光が生まれた。それは呪痕（じゅこん）。術者に従属を誓う言葉が刻まれた魔法陣の軌跡。

直径を広げた呪痕が海面で消えると、円形の盛り上がりが一つ生まれた。その中心からぷわりと現れたのは、大人が四人は入れそうな大きな泡だ。それは割れることなく海面から半分ほど顔を出した。泡は真円ではなく少しだけ尖りがあった。丸いティーポットのような、球体の海豚（いるか）のような形をしている。それが魔法硝子で造られた昴子の愛機、『海の泡号』だ。

「英国王室とお話がつき次第、ご連絡しますわ。それまで待機してらしてくださいますかしら」

男が礼を述べようとしたのを、昴子は掌で止めた。

「今回のこと、報酬の他に少し条件がありますの。それは――」

## 序之二・三大魔都

一八六八年五月――日本幕府解体による江戸城無血開城と政府発足を機に江戸は帝都と改名され、同時期に異妖者が多く蔓延る魔都となった。

魔都は帝都だけではない。世界にはもう二つ魔都が存在する。

一つは英国（イギリス）は倫敦（ロンドン）。

もう一つは中国は上海（シャンハイ）。

どちらも千年以上前から存在する魔都である。

倫敦に多く溢れているのは精霊や幽霊などの異妖者だ。稀に目が合っただけで魂を鷲掴みにするような物騒なものも存在するが、日本の帝都同様、比較的平和に人間と異妖者は共存していた。

しかし、上海は英国との戦争に負けて以降、屍肉で増える尠鬼を皮切りに悪鬼妖怪が数多く溢れ、都市全体がそれらが発する濃い妖気に包まれつつあった。

それにあてられた人間の中から、徐々に退廃的な生活をする者達が増えるようになっていた。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

戦争に勝った英国は上海に租界と呼ばれる居留地区を作った。それに続き、仏蘭西（フランス）と日本も。

裕福な異国の政治家や軍人、商人が多く出入りする租界は、あっという間に華やかな商業地区となった。他国の資金をあてにして、周囲には無数の飲食店、娼館が立ち並ぶようになった。

その隙間に作られたのが阿片窟だ。

英国が印度（インド）との貿易で余った阿片を販売する中心地として選択した上海では、甘い芳香を放ち緩やかに死に誘う阿片は容易く手に入る。上海ではそれに溺れる者が右肩上がりで増加し続けていた。

商売に抜け目のない暗黒街の住人やチンピラ、酔っぱらい、娼婦、男娼、凶悪な犯罪者、阿片中毒者に死体――が、街の通り一杯に溢れることとなった上海は、世界一の退廃魔都と化してしまった。

現在、倫敦、上海、帝都――奇しくも三つの魔都が世界貿易の中心となり始めている。

どの都市も魔都である為に紛らわしいということで、主に貿易関係者や船乗りの間で、それぞれの魔都に通称がつけられるようになった。

魔都（まと）・霊（れい）『倫敦』。
魔都（まと）・怪（かい）『上海』。
魔都（まと）・異（い）『帝都』。
――と。

ゆうるりと変化していく世界の中で、三つの魔都は三通りの進化を遂げつつあった。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

## 一・市井ト読売

「さー、読んだ読んだぁ！」

高くなりつつある帝都の秋空に読売の声が響く。

「号外だ、号外だ！　ここ最近、夜な夜な帝都のあちこちで奇っ怪な声が聞こえるが、そいつの正体をうちの絵師が描き止めたぜ！　毎晩毎晩、揃って帝都を駆けずり回った甲斐があるってもんだよ！」

手にした錦絵新聞の束を読売がぱんっと叩くと、好奇心旺盛な帝都の人々が三々五々集まってくる。

「こいつがそうだ！　なんと異妖者の仕業だったんだ！」

興奮した面持ちの読売がばっと広げた錦絵新聞に、全員の目が集まる。

「わ……」

「こいつは凄いな」

「こんなの見たことないわ」

絵とふりがな付きの文字で構成されている錦絵新聞に描かれた異妖者に、全員が息を呑む。

体長の倍以上ある長く美しい黒髪。それとは似つかわしくない、体躯と同長の十本の爪。すらりとした裸体は円やかで艶めかしい女のそれ。極めつけは首の後ろにある、ぱっくりと開いた大きな口だった。

端正な横顔は美女のものではあるが、うっすらと開いた唇の向こうには人間のものではない鋭い牙がずらりと並んでいる。

「なんと、こいつは空を飛ぶ！　キイキイといやな声をあげながらな！　こいつは何かを探してる。どうも狙いがあるようだ。巡査達も躍起になって調査してる。そっちにもびったり張りついて、記事にしたのがこの号外だ！　もっと詳しいことを知りたいかい？　だったら、この錦絵新聞を買ってくんな！　今日は大特価で一部一銭だぁ！　さあさあ早い者勝ちだよ、買った買ったぁ！」

「頂戴！」

「こっちが先だ！」

「ちょっと、押すんじゃないよ！」

読売の声に、わっと何十本もの手が伸びる。今、世間を騒がせている新種の異妖者をきちんと見たいが為に。それが何を目的としているのかを知る為に。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

## 二・厳戒態勢ノ夜

長く武家屋敷だったが、近隣住人も気づかぬうちに瀟洒な英国式洋館に変わっていたそこは、夕空の下、物々しい雰囲気に覆われていた。

緑の蔦が絡まる黒いハイカラな鉄柵の向こう、金木犀香る広い庭には何十と人が集っている。

「いいか！　相手は異妖者だ！　しっかりと気を引き締めて持ち場へつけ！」

立派な黒い口髭を蓄えた恰幅のいい中年男性の命令に、そこにいる者達すべてが逞しい声で答え、颯爽と持ち場へと散らばっていった。

全員、黒の詰め襟に背の低い黒帽子。腰にはサーベルをぶら下げている。帝都と改名されてから薩摩を中心に組織され、日本中に配置されるようになった巡査達だった。

皆、鍛え上げられた立派な体躯をしているが、表情は暗い。人を相手に戦うことに自負はあっても異妖者相手に普段の鍛錬がどれだけ通用するかわからないからだ。

緊張で張り詰めた空気の中、激しい音をたて玄関の観音扉が開いた。全員が、左右に迫り出しのあるコの字型の館一階中央を見る。勢いよく重い扉を開いた者は、躰の前に杖をたて、仁王立ちしていた。

乾いた砂漠色の探検服を纏った学童のように小柄な躰。寂しくなった白い頭髪。深い皺が刻まれた奥にある眼（まなこ）は生気に溢れ爛々と輝いている。頑固者の証のように口をへの字にしているこの老人こそ、館の主、白虹院忠臣（びゃっこういんただおみ）その人であった。

「たかが異妖者一匹にこのような大仰な警備は不要。この白虹院忠臣一人で充分。この儂が叩き斬ってくれるわ」

忠臣は手にしていた杖をきゅっと握る。

全員に命令を飛ばしていた恰幅のいい男――巡査長が、あたふたと老人の元に駆け寄り、目の高さを合わせる為、深く腰を曲げた。

「そうは参りませぬ、男爵様。夜になると奇っ怪な声をあげ空を徘徊している謎の新種の異妖者は、我々の調査で、今夜この辺りに現れると予測したのです。奴の狙いが何か定かではありませぬが、万が一ということがございます。我々は薩摩代表から男爵様がたをお守りするよう仰せつかっております。そろそろ異妖者が活動する夜となります。どうか、お館の中にお戻りを……」

「そうは申しても、ぬしら、異妖者と戦えるのかのぅ？　それが出来る者も武器もないと見たが」



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

巡査長は気の良さそうな眉をハの字に動かした。忠臣の指摘が正しいのだ。ここにいる巡査達は異妖者とはろくに戦えない。装備も対異妖者用ではない。

「仰るとおりです」

「帝都には異妖者退治に長けた者が多くいるではないか。何故、そやつらに頼まぬ？」

「お言葉を返すようで申し訳ございません。異妖者退治を生業にしてます者達は、大抵はならず者でございます。そのような輩に男爵様のお館を守らせるのは憚られましたので、我々が馳せ参じた次第です」

「しかし、戦えぬ者ばかり集まっても仕方ないではないか。無益な犠牲を出すより実を取れ。ならず者であるかなど儂は気にはせぬ」

どう巡査長が答えようかと思案しているところに、ガラガラとけたたましい車輪の音が近づいてきた。

全員の視線の先に、帝都ではお馴染み、魃印（ひでりがみ）の人力車が止まった。

簾（すだれ）のように顔にかかる緩やかな巻き毛を人差し指で弄び、すたりと人力車から降り立ったのは、薄い灰色のスーツとボルサリーノ、赤銅色の細いリボンタイを締めた男だった。

「何者だ!?」

「止まれ！」

門を潜ろうとした謎の気障男を巡査達が取り囲む。

「私の名は勅使河原鵺吼（てしがわらやこう）。この帝都で探偵をしている。帝都の者ならば、私の名をご存じだと思うが？」

頭脳明晰、英国仕込みのバリツという体術で迫る敵をちぎっては投げちぎっては投げの凄腕探偵の登場に、巡査達がざわついた。

「勅使河原鵺吼様……聞いたことがありますわ。帝都一ご高名な探偵である貴方様が、何故、我が家にいらしたのかしら？」

声は鵺吼の腰辺りからした。探偵が振り向いたそこには……

「毛羽毛現（けうけげん）!?」

と、鵺吼が咄嗟に叫んでしまうほど長い黒髪で、燕尾服を纏った無表情の青年がいた。

「妖怪ではありません。これは私の執事。狗塚瑛（いぬづかえい）と申します」

今度こそ、鵺吼は声がした方を向いた。

そこに立っていたのは、シーズー犬を胸に抱いた小柄な少女だ。ごきげんようと微笑む少女のミルクティー色の髪



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

を、秋風が優しく広げていく。可憐な少女の優雅な所作に、全員がほうと溜息をついた。洋装は増えつつあるが、ここまで完璧に着こなしている者を見るのは帝都でも稀であった。

「おお、帰ったか、昴子」

「ただいま戻りました、お祖父様。この物々しさ、私が少し留守をしている間に何かありましたの？」

「ここに謎の異妖者が来るかもしれんから警固をするとやって来たお客様がたでな。薩摩に頼まれたそうじゃ」

「まあ、そういうことでしたの」

昴子についてちゃっかりと中に入り込んだ探偵は、パチンと指を弾いた。

「昴子、お祖父様……それでは貴方がたが白虹院忠臣男爵と、お孫様の昴子様ですか」

「ええ、そうですわ。ところで、名探偵様。私の質問にお答えいただけますかしら。何故、我が家へいらしたの？」

そうだったとポンと拳で掌を叩き、鵺吼は薄く微笑した。

「とある方からのご依頼です。謎の異妖者から男爵をお守りするようにと」

鵺吼の言葉に巡査達がざわつく。

「なんと！　異妖者の狙いは、まさしくここ、男爵邸であったか！」

「依頼者は、どなたかしら？」

「東南アジアの方です。訳があり、すぐご帰国されましたが」

それだけの情報で依頼者が誰か見当のついた昴子は、静かに頷いた。

「そうでしたの。わかりました。では、勅使河原様も巡査がたと共に警固に参加していただけますかしら」

「承知しました。この勅使河原鵺吼、受けた依頼は必ず遂行いたします。大船に乗ったつもりで、普段通りにお寛ぎいただければと」

ふわりと広げた手を胸と背に添え、仰々しく頭を下げる鵺吼の前を軽やかに通り過ぎ、昴子は忠臣の肩に手をかけた。

「お祖父様。皆様を困らせてはいけませんわ。昴子と一緒に中へ戻りましょう。ずっとお望みでらした緑茶を受け取ってまいりましたから、これを飲んで寛いでおきましょう」

「うむ。昴子がそう言うのなら、しかたない。そうしてやろう」

助け船にほっとした後、巡査長は敬礼をし、忠臣と昴子、そして影のように付き従う瑛を見送った。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

## 閑話一・一輪寺デノ怠惰ナ二人

遊女の遺骸を投げ込まれるので有名な一輪寺には、今日も死体が二体、無造作に投げ込まれていた。

その処理を済ませた一輪寺住職慈蛍（じけい）は、やれやれと僧堂の扉を開ける。

「おう、お疲れ」

夕焼けに染まる上がり框（かまち）では、藍墨茶（あいすみちゃ）色の着物の下に大輪菊の描かれた黒襦袢を纏った眼帯大男が、煙管片手にごろりと横になっていた。

「ほんま疲れたわ。めっちゃ疲れたわ、今な。かわいそうなお嬢ちゃんらの死体片付けて、やれやれ思て帰って来たら、いきなり目に飛び込んできたんが男の褌（ふんどし）て、なんやそれ。死にたなるわ。せめて隠さんかい、雨月（うげつ）」

「めんどくさいこと言うなよ。ほら、あんたの分もあるからよ。遠慮せずに飲めって」

もう既にそこそこ飲酒しているらしく、酔っぱらい特有の微笑を浮かべた雨月は慈蛍に徳利と酒杯を差し出す。

「当たり前や。ここ、僕の家やねんから。いただくっちゅうねん」

雨月が持ってきた味噌や塩、天麩羅と酒を挟んで、慈蛍もふわりと座り込んだ。

[redacted]

「まあ、まだな。だけど、珠沙華以外から仕事の依頼が来たんだよ」



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

「ほお、どんな？」
「異妖者退治。依頼してきたのはやくざ者だ。密造酒を夜な夜な舐めて盗む異妖者がいるんで退治して欲しいんだとさ」
「なるほどな。で、どんだけふっかけたん？」
雨月はくいっと酒を飲み干して、指を三本立てた。
「三十円か。めっちゃぼってるがな。なかなか剛気やなぁ。断られへんかったんか？」
「その異妖者、なーんか強い奴らしくてよ。組の奴が何人か死んじまったってのもあって、引き受けてくれる奴がいなかったんだとさ。てか、やくざ者だと憂い無くふっかけられるんで楽しいなぁ！」
久々に入る憂いのない大金にほくほくしながら、大男は豪快に酒を煽る。
「まあ、そやな。僕かて葬儀代そこそこふっかけとるし」
「断りなしで死体投げ入れてく奴相手だったら、それでいーじゃねぇか」
どういう仕掛けか誰も知らぬが、慈蛍はどこの誰が死体を投げ込んでいくかをすべて把握している。それで年に一度、まとめて該当先へ請求にいくのだ。
「しかしなぁ、あんな小さかった雨月と珠沙華がなぁ。もうほんま立派な一人前やがなぁ」
冷めてもさくさくと心地よい歯触りの甘鯛（ぐじ）の天麩羅を口にして、慈蛍は感慨深げに首を振ってから酒を煽る。
「そういやあんた、俺が子供の頃から年取ってねぇよな。老けねぇっつうか」
「この街で年取らん奴、一人や二人やない。珍しないがな」
やっぱりな、という表情で雨月は杯に酒を注ぐ。
「いつからか知んねぇが、ずーっと一輪寺で暮らしてんなら、珠沙華のこと知っててもおかしかないか。あいつの祖父さん、有名な刀鍛冶だったらしいし」
「ん～？」
「いやね。やっぱ、あんた、昔から珠沙華のこと知ってたんだなーって」
「うん、そうやけど、なんで？」


2014 RENGYOKUTO RikaRokka

## 三．新種ノ異妖者、白虹院邸ニ来襲

昴子達は、薄緑色（エメラルドグリーン）のヴィクトリア調の家具が揃えられた応接間にいた。

主の座るソファに忠臣が座り、隣の長いすに昴子と蜜柑が腰掛けている。

瑛が買い物袋を開ける。そこには色取り取りの茶筒が三つ入っていた。

「どれから飲まれます？　お祖父様」

「そうじゃな。儂が飲みたいと言ってたのは……」

「こちらの赤い茶筒ですわね。瑛」

昴子の声に頷き、瑛は黙々と茶を淹れる準備を始めた。

「もうすぐ夕食の時間ですけれど、異妖者騒動が落ち着くまで無理かもしれませんわね。明日用に買ってまいりました羊羹をいただきましょうか」

「謎の異妖者は新種だそうじゃ。もしかしたら……」

「あのときの異妖者に関わるものかもしれませんわね」

昴子の返答に、忠臣は思案顔で顎を撫でた。

「その為に、勅使河原様を寄越してくださったのですから、私達はおとなしく館の中で待機しておきましょう」

「うむ……」

瑛が緑茶と羊羹を二人の前へ置く。

「ありがとう、瑛。見てください、お祖父様。綺麗な緑色ですこと。瑛は緑茶を入れるのも上手になりましてよ」

「うむ……」

ごつごつとした渋い茶色の湯飲みに手をかけながらも、忠臣はどこか上の空だ。

「ん……微かに塩味も感じますわ。良い茶葉ですけど、お前の腕も良いから美味しいんですのね、瑛」

褒められても瑛は無表情のまま、昴子の白く繊細な茶器におかわりを注いでいる。

「うむ……」

「私、何も申してませんわよ、お祖父様。瑛、次のお茶を試したいですわ。金色の茶筒のを淹れてくださる？」

瑛は無言の無表情で金色の茶筒を手にした。

「ふう……ごちそう様でした。美味しかったですわね、お祖父様」

「うむ。ところで、昴子――」

「緑茶を置いていたお店が海のそばで、潮風のせいか、べたつきが気になりますの。お風呂を使ってまいりますから、その間、蜜柑をお願いしますわね」

祖父の言葉を言葉で遮り、隣で兎のぬいぐるみを噛っている蜜柑を抱き上げ、忠臣の膝の上に置いた。



2014 RENGYOKUTO RikaRokka

「蜜柑。お祖父様がここでごゆっくりできるよう、お行儀良くしているんですよ」
聞いているのかいないのか。蜜柑は忠臣の膝で、変わらず兎のぬいぐるみを噛り続けていた。
昴子に続き、瑛も応接間を後にした。愛玩犬と取り残された忠臣は、うむむと小さく唸る。
「昴子は、儂がどうしたいかお見通しのようだのぅ」
蜜柑に語りかけるが答えはなく、くちゃくちゃとぬいぐるみを噛る音だけが聞こえてくる。
「うむ……」
忠臣は顎を撫でながら宙を見る。
「やはり、儂が責任を取らねばならぬ問題じゃ」
忠臣は蜜柑の両脇に手をかけ、ひょいと抱き上げた。正面から鼻の低い顔を見つめる。それをされるのが嫌いな犬は兎のぬいぐるみを咥えたまま右を向いて動かない。
「蜜柑、お前は強く立派なおなごじゃ。儂が面倒を見ずとも一匹で大丈夫じゃな？」
蜜柑は答えず、ぶふぅと溜息をついた。

猫足つきの白い湯船の中、ラベンダーを中心に香り良いハーブの入った小さな麻袋が入っている。それを手遊びしながら、昴子は湯船の縁に頭を乗せた。腰まで届く長い波髪が床に着く。
燕尾服の上着を脱ぎ白シャツの袖を肘まで捲った瑛が、髪のそばに跪き、最上級のジャスミンの香り漂うサボンの泡をたてた。
「さっきの変な探偵の依頼者、誰かわかってるのか」
物言いとは正反対の恭しさで瑛は昴子の髪を洗い始める。
「ええ、勿論。東南アジア在留中、あのお方にはずっとお祖父様が世話になってますもの。そのうえご自身の身の危険を承知でわざわざ来日して帝都一の探偵にご依頼してくださったお気持ち、無下にするわけにはまいりませんわ。そこまでされるのには何か訳がおありだと思いますし」
「盗賊王か」
「そうだと思いますわ……あ、そこもう少し強く擦ってくださる？」
昴子に言われた左耳の上を、瑛は少し強く擦る。
「巡査は役立たずだ」
「ええ。あの方々は普通ですものね。武器もあれでは臆病な異妖者を追い払うだけしかできませんでしょう。ですが、あの方々もお仕事ですから」
「盗賊王だけじゃなく、薩摩の顔もたててやるし、昴子は懐が深いな」


2014 RENGYOKUTO RikaRokka